

現代文化の争闘 (完)

ジ ム メ ル
伊 達 四 郎 譯

近代の即ち一九一四年迄に發展した文化の若干の現象に於て、常に新形式への憧憬が舊形式を覆した總て之迄の文化變動との相違を叙述してみやう。吾々は今この領域に於ける諸々の發展の窮極の動機として、亦意識が外見上或は現實に新しい諸々の組織へ進む場合にも、尙其等の窮極の彈機として、形式一般に對する敵對を明かに知り取ることが出来る。吾々が少くとも數十年來何らかの或る共通的な理念、一般に廣く考へた場合、一つの理念の下には決して生活してゐないと云ふ事は恐らく——此の事を前以て言つて置くならば——此の精神運動の現象上否定的なものに對する別の言

葉に過ぎない。例へば中世が教會基督教的理念を有ち、そして文藝復興期が超越的權力の承認に依つて初めて通用するやうなものでない所の價值としての地上的自然を再得した如く、理性の支配に依り普遍的な人間幸福と云ふ理念の爲に生きた十八世紀の啓蒙時代の如く、又藝術家的な想像に依つて學問を淨化し學的認識に依つて藝術に廣大無邊の基礎を興へんとした獨逸唯心論の偉大な時代の如くにはである。然し今日教養ある階級の人々に、彼等が如何なる理念の下に本來生活して居るかと問ふならば、多くの人々は彼等の仕事からして専門的な答を與へるでもあらう。が彼等を全體

的な人間として支配し總ての特殊的な實證を支配する文化理念に就いては聞く所少いであらう。既に個々の文化方面内にある歴史の變動の固有の段階が今、生の純然たる直接性が現象の中に現れやうとする事であれば、そして其れが此の事を唯何等かの形式に於てのみ可能にし、此の形式が不充分である事は正にかの元々決定的な動機を裏切るものである限り、謂はゞ材料が總括的な文化理念に對して缺けてゐるのみではなく、之に依つてその新形成が捉へらる可き筈の諸領域は、斯かる觀念的な統一化を許すには餘りに多様、否、異質的なものである。個々のものに移つて、私は先づ藝術の現象に就いて語らう。

全體が未來派と云ふ特徴を有つ一貫した努力から表現派といふ性格を有つ方向が幾らか判然とした統一をもつて明瞭に現れて來たやうに見える。若し私に誤がなければ、藝術家の内的動性が體驗

される通りに全く直接に作品の中に或は一層正確には尙作品として持續することが、表現派の意味である。かの内的動性は自分の外の存在、實在的な或はまた觀念的な存在からして自分に押付けられる様な形式で、營んだり或は其の中に自分を注ぎ込んだりはしない。其故にそれは存在若しくは現象の模倣とは、之の客觀的自然法則的な形に於ても、亦、印象派の欲した如く、之に就いて吾々の持つ瞬間的な感覺的な印象の形に於ても、何ら係はる所ないものである。何となれば印象も亦要するに藝術家の純固有な専ら内部から限定された産物ではなく、印象それ自身は何か受動的なもの依存的なものであり、そして其れを反映する作品は藝術家の自己自身の生と與へられたるもの、異他性との一種の混合である。そして此の内容上主觀外のものが斥けられる如く、初め何處からか、因襲と手法とから、手本と固定した原理とから藝

術家に近づいて來る狹義の形式賦與も斥けられる。總て之等のものは、自分を自分自身から創造的に溢れ出さうとし其故に又之等の諸形式に従ふ事があれば自分をば單に歪められたもの、硬ばつたもの、正真でないものとして作品の中に見出す生の妨礙者である。私は表現派畫家の（そして其れに應じて、唯さう簡單には言表し得ないだけであるが、他の總ての藝術に於ける）制作を絶對的な純粹性の故に次のやうに言ひ度い、即ち彼の精神的動性が畫筆を持つ手に雜作なく傳はり——宛も身振りが身内の動性を、叫びが苦痛を表す如く——手の運動がすらくと其れに従つて、畫布の上最後に成立する形成物は、何ら外的なものも異他的なものを自分の展開の中に許容しない内面的な生の直接な沈澱であると。表現派の繪も亦それが全く何の『類似性』をも有たない對象に依つて標題が附けられると云ふ事は、一應異とするに足り

又恐らく無用の事ではあるが、然し實は從來の美術の假定から考へられる程無意味なものではない。何となれば表現派の作品として迸り出る藝術家の内の動性は勿論、見つけ出せない様な或は名づけられない様な魂の源流より來る。然し其れは無論また外的な客觀物を通して刺戟からも生ずることが出来るのである。そして之迄ひとが斯かる刺戟の藝術的に生産的な成果が、此の刺戟の由つて以て出て來たものとの型態學的類似性を示す（此の假定に凡ての印象派は基いてゐる）と考へたに反し、表現派は此の假定を解消してしまつた。其れは或る原因と其の結果とは其等の外面的な現象形式の如何なる相等性をも有つ必要はなく、兩者の唯内面的な動力的な關係は何ら實物上の親近性の中に移つて行く必要はないと眞面目に考へる。斯くて藝術家がヴォーリン又は人間の顔を注視すると諸々の感動が湧き、其等は彼の藝術

的精力に依つて變容され乍ら、結局全く別の様に見える形を自分から出すのである。表現派の藝術家は『モデル』の代りに、内容的には唯自分自身のみ忠實な彼の生を刺戟して動かしめる所の『誘因』を置くのであると云ふことも出來やう。抽象的ではあるが、然し全く實在的な意志の相を示す言葉を用ひるならば、夫は生の自己存在の爲の戦である。生は自分を語る場合には、正に唯自分自身のみを語らうとし、其故に現實の爲に通用するやうな他なる現實に依つて、或は又法則の爲に通用するやうな法則に依つて自分に課せられる凡ての形式を破壊する。確に概念的に見れば、最後に出來上つた形成物も形式を有つてゐる。然し之は此處では藝術的志向したゞ謂はゞ避くべからざる外面性に過ぎない、之は他の總ての藝術理想の諸形式の如く、創造的な生に依つて擔はれるだけであり實現されるだけであるやうな意味を其れ自身

に有つてゐるのではない。其故に此の藝術は、生がある目標に依つて限定されずに力に依つて動かされた自分の奔流に於て美醜の彼方に自分の意味を有つ間は、斯かる諸形式の現象と結び付く美醜に對しても亦係はる所ないのである。其の際生する作品が吾々を満足せしめないならば、それは新しい形式がまだ發見されてゐず、そして謂はゞまだ問題になつてゐないことを證するに過ぎない。形成物が出來、生産的な生の過程が其れを捨てた後に、其れは客觀的に出來上つた物から、之の創造者から離れてしまつた物から人が要求し、然も此の唯自分自身だけを表現する生が謂はゞ嫉妬に燃えて組成物に與へなかつた所の固有の意味と價値とを有つてゐないことが示される。偉大な藝術家の晩年の藝術に認められる特有の嗜癖は既に此の原理的な方向に在るのである。此處では創造的な生は特に自分自身となり、自分自身で豊かなものと

なつて、何等かの傳承的な或は他の諸形式と共有にされる形式を押し退け、作品に於ける自分の現れは自分の其の時の最も固な運命に外ならないものとなる。作品は之から出て非常に聯關的であり意味の豊かなものであるに拘らず、其れは傳來の形式の立場からは屢々、たとへば斷片から出來たものゝやうに、分裂したもの、均齊の無いものに見える。此のことは造形に對する衰へた無能力ではなく、老年の弱味ではなく、老年の強味である。偉大な藝術家は自分の完成の此の時期に於て全く自分自身となり、彼の作品は彼の生の流が自ら生んだもの丈を尙形に示して置くに過ぎない。生の流の特權は生に對して形式を失つてしまつたのである。

さて純粹に形式として完全なそして其れ自身に於て意味のある形式が、かの直接的な生の全く充全な表現であり、又有機的に發育した皮膚の様に

生に附着してゐると云ふことは成程原理的には全く可能でもあらう。そして本來古典的と呼ぶ可き偉大な諸作品には此の事は全く當るのである。然し之等を除いて見れば、藝術に向つて遙かに自分の諸成果を超えて行くと云ふ精神的な世界の特有な構造關係が茲に明かになる。藝術の中には完成に際して守るべき藝術形式の彼岸の裡に生きる或物が語られてゐると主張して宜からう。凡ゆる偉大な藝術家及び凡ゆる偉大な藝術品は、藝術が其の純美術的な意味に於て示すよりも、一層深遠なもの、一層廣大なもの、一層深く隠された源より流れ出て而も其れに依つて攝り入れられ、表現され、認められる或るものがある。此の或るものは扱かの古典の場合には全く藝術と融合したが、其れが藝術の形式に眞正面に反抗し、否、のみならず之を破壊するさう云ふ諸々の場合には其れが感せられ、意識されると云ふ事は一層異色のある

こと、進んで自ら語ることゝなる。ペートヴェンが後期の諸作品で表さうとした内面的な運命は斯くの如きものである。此處では特定の藝術形式が破壊されたのでなく、藝術形式一般が或る他のもの、一層廣いもの、他の次元より來るものに依つて壓服される。形而上學に於てさうである。其れの意圖は實際眞理の認識である。が然し其れに於ては認識の彼岸に在る或るものが語られ、そして又此のより以上のもの或はより深いもの或は單に別なものをば、其れが眞理そのものを壓迫し矛盾に満ちたもの、明かに異論あるものを主張する事に依つて、誤解できないものにする或るものが語られんとする。生の象徴として、或は人間なる類型の存在全體に對する表現された關係として多くの形而上學は、若し其れが『認識』として眞なる場合には、さう眞ではないのであると云ふことは、

精神の典型的な逆説——それは勿論淺薄で吞氣な

樂天論が否定するのが例である所のものである——に屬してゐる。恐らく宗教に於ても宗教ならぬ或るもの、其れが以て現實に宗教である具體的な諸形式の各々が破碎し、そして自身をば異端及び墮落として示す一層深遠な其れの彼岸がある。人間のある作品には、恐らくは魂の創造力から生ずる各作品には、其の形式に嵌り込むより以上のものがある——之に依つて其れは單に機械的に生じた總てのものから區別される——と云ふことが、其れが此の形式に反して起つた場合、初めて判然と吾々に分るのである。斯かる極點に於てはなにか一般的な構造上、茲に、ヴァン・ゴッホの藝術が今有たれてゐる所の關心に對する動機が存する。何となれば恐らく他の總ての畫家に於けるよりも一層よく次のことが感じられる、即ちそれは茲では情熱的にそして繪畫の限界を遙かに越えて躍動する生が、全く單一的な廣さと深さから突然現

れ乍ら、畫才の中に謂はゞ唯其の奔流に對する水路だけを見出し、而して之は謂はゞ偶然的にてあつて、生は自分をば同様に又實踐上の或は宗教上の、詩の或は音樂上の實證に於ても超生せしむるかの様であると云ふことである。茲で考へられた一般的な精神の方向と云ふ意味で多くの連中をアン・ゴツホに括り付けて居るものは、何より此の情熱的な、其の直接性に於て感じられる生——其れは無論たゞ此處彼處でのみ判然たる形式を被て其の直接性を破る對象物の中に現れるのである——である様に見える。他方今日の青年の一部の間に完全に抽象的な藝術への憧憬の存することは、多分、生は直接的な赤裸々な自己表現の熱を以て、如何にして煩ひ無しに目論むかには拘り無く、矛盾と不可能との中に赴くのであると云ふ氣持から起るのであらう。此の若い人に於ける生の巨大な動性こそ、かの傾向をまた絶對的な極端の

中へ驅り立てるのである。尙、殊に若い人が茲に特性付けられた運動を代表すると云ふことは一般に理解される事である。何となれば若し一般に既に歴史的な諸變動が青年を通して外的な若しくは内的な革命主義に依つて擔はれるとすれば、今日の變動の特殊な本質の中に矢張り其の事を指示する特殊なものがある。何となれば老人が衰へゆく生活力の爲に、自己を益々生の客觀的な諸内容（それらは今日の意味では同様に生の諸形式として示さるべきである）へ集中するに反し、青年には何よりも生の過程が問題である、彼は唯其の諸力と力の満溢とのみに生き盡くさうとし、如何なる對象に於てとかは比較的無關心であり、又其故に屢々其れに對して不實であり過ぎる位である。唯生自身と總ての形式を殆ど輕蔑するに近い其れの現れそのものに王冠を與へる文化方向に於て若々しい生そのものゝ意味が幾らか客觀化されるのである。

最後に此の考察の範圍内で尙ある確證的な基礎が文化促進の内及び廣くはその外に於ても見られる。現今の多くの若い人達に於ける獨創、慾は多様であり、然も虚榮と辛苦とを自分自身の爲にし他人にはセンセイションを起させたりする程排他的では決してない。更によいのは現實的な固有の生を現す情熱が其の中に實際働き、そして其れが現實にその現れであると云ふ確實性は、他の場合に存する如何なるもの、傳承された如何なるものも此の情熱の中に取入れられない時に、ただ與へられるだけである様に見える。何となれば之等は既に固定せる、直接的な創造性の彼方で客觀化された仕方及び形式であつて、此處へひとは固有の生を灌ぎ込み、そして此處に於て其れは自分の固有性を失ふのみならず、正に自分の生命性を最早生きてゐないものへ消失してしまふ處があるからである。之等の場合に救はる可きものは寧ろ生の

個性ではなく個性の生である。獨創性とは、生は唯自分自身の傍に在りそして自分にとつて外的な客觀化された硬い諸形式を自分の中に或は自分の流を其等の中に取り入れなかつた事を吾々に確認せしめる所の認識根據 *ratio cognoscendi* に過ぎない。此の事は恐らく一般に（茲では單に暗示して置くに過ぎないが）近代の個人主義の根底を爲す所のより深い志向である。――

私はさて同様の根本意志を、極く新しい哲學的運動の一つで、歴史的に固定された哲學の諸形成から最も決定的に離れて居る者に就いて参照して見やう。私は其れを實用主義として表さう、何となれば此の名稱に基いて理論の最も周知な分脈、私が他の點に於ては最も皮相淺薄であると思ふアメリカ的な理論が命名されて居るからである。各々他の之迄に成立してゐる斷定のやうな此の斷定とは離れて、吾々の今の關心に對して次の意向は

私には決定的なものとして現れる。文化の總での特殊領域の中で認識ほど、生に對して自主的であり自律的であり、生の動性と急迫、個別化と運命とから離れて安らつて居るものはない。二の二倍が四であること、或は物質の引力は距離の自乘に反比例することが、生きた精神が其れを知るか否かに論なく、又其れが固く認識されて居る間に如何なる推移を人類が體驗するかに係りなく妥當するのみならず、直接に生の中に織り込まれた諸々の認識も亦自己の役目を其れに於て演じる、と云ふのは其等は其れの流の浮き沈みに於て何か其れにとつて觸れ得ない或るものであるからこそと云ふ理由に依つてである。所謂實踐的知識も亦勿論理論的なもので唯追加的に實踐上の目的へ應用されるに過ぎず、而も自己定立的な秩序の知識として、眞なるものゝ理想的な王國に常に從屬してゐる。

此の昔から眞理に對して承認された獨立性は實

用主義の異を唱へる所である。生の各々の舉止は内的なものも外的なものも——さう其れは論證する——其れの眞理が我々の生を保有し要求し、其れの誤謬が我々を破滅に導く所の何らかの認識觀念に基づく。然し吾々の諸觀念は心の習得に依存して、吾々の實踐的な生が織り込まれる實在の機械的な反映では決してない故に、若し諸觀念が専ら主觀的な考へ方の推斷に於て發展し乍ら、かの實在内に於て期待された且計量できる結果に到達すべきであると云ふことなれば、夫は最も注目し價する偶然でもあらう。眞實らしいと云ふことは寧ろ吾々の行爲する生を限定する無數の觀念の中で、他の諸觀念が反對結果の爲に誤つた觀念と呼ばれるに反し、或る諸觀念が此の生に促進的に活動的に影響することに據つて眞なる觀念の名を保有することである。其故に生の流を正しく導く爲に追加的にと云つた工合で其の中に入込むに過

ぎない所のかの最初から獨立的な眞理は存せずその逆である。此の生の流が生みそして反作用して其の方向に影響を與へる無限に多くの理論的要素の中で、その影響が我々の生の意志に適ふやうなものは偶然的である、とても言ひ得るかも知れない。然し乍ら若し此の偶然がないとすれば吾々は存在する事は出来ないであらう。そして之等の諸要素が吾々に眞の正しく認識する要素を約束するのである。諸々の客観物自らがそして又我々に於ける自主的な悟性が吾々の觀念の眞理内容を規定するのではなく、生自身が或は其の絶大な有用性に依り或は其の最も深い精神的缺乏に依つて、吾々の諸觀念間に一方を充分な眞理、他方を充分な誤謬として示す價値の序列を生ずるのである。私は此の説を此處で詳論する事も批評することも出来ない。又私にとつて問題になるのは其れの正不正ではなく、其れが今日恰度發展して來たもので

あること、其れが認識から、自主的な觀念的法則に依つて支配されつゝ自由獨立の王國であると云ふ其の要求を奪ふと云ふことである。生の源から給せられ其の諸方向と諸目的との總體と統一とに依つて導かれ、そして其れの基礎的な諸價値からして正當と認められるものは、其の中に織り込まれた要素である。生は其故に之迄一見其れから離れて自律的に見えた區域を超えて其の上に分分の主權を要求する。そして一層深い世界觀的な言葉で以て此の事は次の様に表すべきである、——認識の諸形式は其等の内面的な適合、其等の自足的な意味に依つて、吾々の全觀念界に對して鞏固な枠又は破れない畫布を形作り乍ら、生の流に依つて且又其の中に融解され、其れの生成し變化する諸力と諸方向とに對して、其等に對して固有の權利と無時間的な妥當性とから反抗することなしに、自在に形作られるものとして示されると。認識の

問題の此の改容を遙かに超えて生が形而上學的根
 本事實、存在一般の本質となつて、各々與へら
 れた現象が絶對的な生の脈動或は發現の仕方若し
 くは發展段階である場合、世界觀の中心概念とし
 ての生は最も純粹な形になる。生は世界が精神へ
 總て展開する時は精神として現れ、物質としては
 没してしまふ。そして此の理論が、凡ゆる理論的
 なもの、悟性に適合する様に媒介されたものの彼
 岸に於て、物の眞の内面性を把握する『直觀』に依
 つて認識の問題に答へる時、此の事は唯生のみが
 生を了解することが出來ると云ふことを意味す
 る。其故に此の方面から見て、認識の過程が全然
 生自身の機能として示され其れにとつて本質的な
 る故に其れにとつて全く浸透できる客觀を、自分
 に對して持つ事が又確實である爲には、總ての客
 觀、認識の對象が生の中に翻轉されねばならな
 かつた。故に根本的な實用主義は世界形像を主觀の

側からして生の中に融解したが、此の事は茲に客
 觀の側からも現れたのである。生を外にしての世
 界原理としての形式、固有の意味及び固有の力が
 爲す存在規定としての形式に依つては何物も存し
 ない。此の形像に於て尙形式として示されるもの
 があるとするれば、夫は唯生自身の恩恵に依つての
 み存するのであらう。

此の形式原理よりの離反は、尙古典的な形式思
 想に依つて支配された以前の時代が總ての哲學上
 の救を見た所の宗結せる體系に對する、實用主義
 のみならず、生に對する近代的な感情に依つて満
 たされた凡ての思想家の嫌惡の中に凡て歸せられ
 る。體系は總ての認識を、少くとも其等の最も普
 遍的な諸概念に於て、或る根本動機からして幾ら
 か體系的に、上下の秩序を附けられた諸項目の（凡
 ゆる方面より鈞合よく完成された）構成へ統一せ
 んとする。此の構成の建築的（美的完成に於て、成

功せる完璧と無疵とに於て、體系は其れの實質的な正常性と現實に存在の全體が會得されたと云ふ事とに對する證明を見るのである、而して此の事は決定的な點である。其れは形式原理一般の極點である、何となれば其れは形式の内面的な充足性と完結性とを眞理の最後の試金石とするからである。そして又其れは常に形式を形成しはするが然し又常に形式を破壊する生が警戒する所のものである。之等の諸説が生に對して得る世界觀的態度は二つの方向に確定される。一方では機械論が宇宙的根本原理として生から卻けられる。それは恐らく生の一つの技術である、恐らく其れの一つの没落現象である。他方では形而上學的獨立態としての、凡ゆる存在の最高のそして無條件的な嚮導又は實體としての理念が同様にさうである。生は自分の下に在るものに依つて支配され様とせず、然し又一般に、其故に自分より上位にあると確認す

る理念性に依つても支配され様としない。若し夫にも拘らず如何なるより高次の生も、理念——超越的權力としてのであれ、道徳的の或は他の價値的な要求としてのであれ——の指導の下に於て自分を知るより致方ないとすれば、此の事は諸々の理念自身は生から來ると云ふことに依つてのみ、可能に見える或は夫に依つてのみ旨くゆく機會を有つ様に見えるのである。自分の指導者及び救ひ主、自分の反對者及び征服し||征服される者を自分自身から産み出すことは生の本質である。其れは自分を維持し且謂はば迂回して自分を自分自身の生産物の上に高める。そして之が其れに自主的に向ひ乍ら對立して居ると云ふ事——此の事は其れ自身の根本事實であり、其れ自身の生きる仕方である。其れが斯くて自分自身一層高まりつゝ這入つて行く敵對性は精神としての生の悲劇的な争闘であつて、之は生が之を現實に自分自身より産み出

し、従つて有機的に必然的に之と結合してゐる。自ら意識してゐる程度に應じて勿論今日一層よく感じられるのである。

最も一般的な文化上の點に關して見れば、此の全運動は絶對的な人間理想及び教化理想としての古典よりの離反を意味してゐる。何となれば古典は全然形式の徴の中に、生と創造とに對する規範としての自己の靜的な完結性に依つて自己を知る所の、完成してそれ自身に満足せる形態の中に存してゐる。此處でも古い理想の代りに積極的に充足せるもの及び明にされたものは確にまだ置かれてゐない。其故にこそ古典に對する戦は、初めは全く新文化形式を齎すことが問題なのではなく、自分自身を知る生が唯形式一般——其の歴史上の代表は古典である——の強制より自分を解放することであると云ふことを示してゐる。

倫理的文化的特殊現象に於て類似の根本現象に

關して極く簡單に言つて置かう。『新しい倫理』なる名を以て、現行の性的狀態の批判が呼ばれて居り、之が宣傳は比較的少數の連中に依つて行はれ然し之の追求は多くの連中に依つて共になされて居る。此の批判は主として現行の狀態の二つの要素、結婚と賣淫とに對して向けられて居る。其の動機を全く原理的に言表さうとすれば次の様である、戀愛的牛は其れの最も固有な力と感覺に適合せる方向とを、吾々の文化が以て其れを幽閉しそして其故に不自然にし矛盾せしめた諸形式に對して貫徹しやうとする。本來の戀愛的根據以外の理由より種々と結ばれ、其れの生きた流を種々或は駄目にするか或は其れの個別性を頑固な傳統と法律の無慈悲とに於て打碎かれる所の結婚、若い人の情事生活に穢はしい、戲畫化された、彼の本性に矛盾した道筋を強ひる所の、殆んど合法的な制度となつて居る賣淫——其等は直接的な且眞

正な生がそれに對して反逆する所の形式、恐らく他の文化状態に於ては其れに取つて夫程不適合ではなかつた、が然し其れの窮極の源から迸り出る諸力をば今日自己に對して喚起して居る所の形式である。形式の破壊への積極的な根本衝動に對して之迄に積極的な新形式の形成が如何に殆んど對應してゐないかは、此處では他の文化領域に於けるよりも比較にならぬ程決定的に確定されたのである。彼の革新家達の如何なる建議も彼等に依つて宣告を下された形式の充分な代償とは一般に如何しても感じられない。新しく起つた形式に依る舊形式の征服及び代償と云ふ典型的な文化變遷は此處では全く殊更遠くに遡く、後の形式へ包まる可く定つてゐる方は暫くは、謂はば丸出しに、眞の戀愛的生に依つて棄て去られる諸形式に對して直接に刃向ふ、が然し夫が爲に屢々強調された所の矛盾を犯しつつ空虚なものの中に立つてしまふ。

其の譯は戀愛的生は何とかして文化機關の中に入るや否や、形式に嵌められる必要があるからである。にも拘らず前の諸考察に對應して、唯皮相的に見ると此處には單なる放縱と無政府主義的な慾望としかない様に見える——此の領域に於て單なる無形式性は既に此の側面を示すからと言つて。然し乍ら斯かるものが一般に存する深處に於ては事情は異なるのである。戀愛の眞の生は全く個人的な水路の中に流れ、そしてかの諸形式に向つて敵對する。何となれば之等は此の生を一般的な圖式の中に捉へ、従つて之の其の時その時の特殊性を壓制するからである。他の多くの場合に於ける如く此處に於て、個別化と一般化との戦と同様に抽象的、形而上學的にではなし戦ひ盡されるものは生と形式との間の戦である。——

現在の宗教性内のある調子は全くそれと同じ説明を要求する様に私には思はれる。私は之を、精神

的に進歩した少からざる人々が自分達の宗教的要素をば神秘性で以て満足させて居ると云ふ、十年乃至二十年來觀察された事實と結付けて見やう全體に於て之等の人々は皆現存の教會の觀念圈内で育つたものであると認めてよい。彼等は神秘性へ傾く故に二重の動機が明である。一は宗教的生を客觀的な内容的に限定された形像系列に於て營ましめる形式が、此の生を最早満足せしめないこと。他は其れの憧憬が夫だからとて滅却されはせず、他の目標と道筋とを求めて行くこと。之等を神秘性の方向に移して行くことに對して何より決定的に現れることは、夫が爲に宗教的形式の輪廓、境界が廢棄されると云ふことである。茲に各個人的な従つて結局部分的と感じられる形態を超越した神性がある。茲に如何なる教義的制限にも打突からない宗教的感情の限り無い廣さと形式の無い無限への其れの深化がある。茲に力となつた魂だけの

憧憬からの其れの發展がある。神秘性は凡ゆる超越的形態から未だ自己を解放することが出來ずに、謂はば一時、ただ限定された内容的に固定された形態のみから自分を解放することの出來る宗教的な性質の人々の最後の避難所のやうに見える。最も深い發展の方向は然し——假令其れが其れ自身矛盾に満ちそして其れの目標から永遠に遠ざかつて居らうが居るまいが——信仰形像をば宗教的生の中へ、内面的な生の過程の純機能的な限定態（此處から彼の形像が現れたのであり又依然として現れる）としての宗教性の中へ解消すると云ふ點へ肉迫して行く様に私には見える。之迄宗教的文化の推移は茲で示された仕方で行成された。即ち宗教的生の一定の完成態は、之の生じた場合には其れの力と本質的特徴とに完全に適合し乍ら、漸次外面化し窮屈になり、そして、宗教的脈動の動力と今の方向とが再び生きてゐる所の新し

く現れて來た形式に依つて押退けられる。即ちある宗教形態、一系の信仰内容が矢張り古くなつた其等の代りに現れて來る。今や然し大多數の人々にとつて宗教的信仰の、彼岸に實在する諸對象が徹底的に排斥された——夫が爲に其等の宗教的意欲が無くなると云ふことはなしに。然し此の中に働く所の、そして他の場合ならば新しい充分な教義内容を齎す所に明になる所の生は、信仰する主觀と信仰される客觀との全き對立の中では最早適切に表現されてゐないと感ぜられる。此の内面的な全變調が遙かに見通す窮極状態に於ては、宗教は一種の直接的な生形成として完成するであらう。謂はば生の交響樂の内の個々の旋律としてではなく、此の交響樂が全體として奏でられる音調として。生の場面は總ての世俗的内容に依つて、行動と運命、思惟と感情とに依つて満たされ乍ら、之等總てと共に、吾々が唯宗教的とのみ呼び

得る所の謙讓と鼓舞、緊張と満足、冒險と献身との唯一の内面的な統一に依つて貫かれるであらう。斯く經驗された生自身に於て——此の生に對して何か他に其れが收まる個々の形成に依つて、其れが結晶して出來た個々の信仰内容に依つて現れて來る様に見える絶對的な價值が感ぜられるであらう。之に就いてアンゼルス・シレシウスは、勿論神祕性に尙最後まで残つて居る形に移してではあるが、彼が宗教的價值を何等かの特殊なものに固定する總てのことから解放して、一般に生きた生を認識した時に高らかに歌つてゐる。

聖者、酔ひなば、

神に嘉されん

祈りて歌へる時の如くに。

所謂『此岸の宗教』は論じない。何となれば之も亦やはり一定の諸内容に結び付いてゐて、唯之等が超越的である代りに經驗的であるに過ぎない、其

れも亦宗教的生を優美と雄大、壯美と叙情的動性などの諸形式の中に流してしまふ——要するに其れは超越的宗教性の隠れ乍ら尙働いてゐる殘滓に依つて、不明瞭な中間物を生きてゐるのである。

茲で然し問題となるものは直接的な凡ての脈動を舍んだ生の過程としての宗教性である、其れは存在であつて所有ではなく、若し諸對象を有つ場合は信仰と呼ばれるが然し生自身が自分を完成する仕方である所の敬虔なることであつて、外部から必要を緩和することではなく——表現派の畫家が自分の藝術的必要を外の對象への適合に依つて満足するのでない如く——其れは連續的な生が未だ必要と充實とに分たれず、従つて其れに一定の形式を規定する如何なる『對象』も要しない深處に於て求められるのである。生は自分を直接宗教的な其れとして表さうとし、與へられた語彙と規定された文章論とを有つた言葉に於てではない。一見

逆説的に見える言葉を以て言へば次の様にも言ふことが出來やう。魂は其れが特定の豫定された總ての内容への信仰を失つた時に、自分の信仰性を護らうとすると。

屢々發端、奇しい不明瞭性、己自身を誤解する純否定的な批判に於て感じられる所の、諸々の宗教的魂の此の方向は、無論かの最も深い困難に遭遇する。それは即ち生は精神的なものとして表現される瞬間に、唯諸形式——假令其等が同一の作用に於て自由を制限するとしても、其等に於てのみ生の自由も亦現實的になり得る——に於てのみ其のことが出來ると云ふことである。確に敬虔性或は信仰性は生自身と共に與へられて居る魂の機制であり、其れに宗教的對象が與へられない様な場合があるとすれば、其の場合にも其の生を一定の仕方で色付けるものである——宛も戀愛の情の深いものが自分にとつて愛するに價する個體に決

して出會はないものとすれば、自分の性格を斯かるものとして常に護りそして保證するに相違ないやうなものである。けれ共一體、宗教的生の根本意志は必ず客觀を必要とするのではないか、かの純機能的な性格、其れ自身無形式的な唯生一般の浮き沈みのみを色付け神聖にする（今多くの宗教的動性の確定的な意味を構成する様に見える所の）動力は、單なる本來觀念的に止る中間現象、現行の宗教的諸形式が宗教的な内面の生に依つて粉碎され投棄てられて而も之が其等の代りに新しいものを置いてゐない——其の際他の場合と同じく茲に、此の生は一般に固有の客觀的な意義及び要求權と云ふ形式なしに可能でありそして内部より破り出る自分の力を唯送り出さすことで以て足りると云ふ觀念が生ずる——状態の表現ではないかと云ふことは私にとつては疑しいのである。宗教的衝動が凡ゆる『啓蒙』に拘らず存續する（何となれ

ば之は宗教から唯その着衣のみ奪ふことは出来るが其の生を奪ふことは出来ない）にも拘らず、教會的に傳承された諸宗教を更に維持することの不可能は多くの近代人の最も深い内面的な苦難に屬してゐる。此の生を完全な自己満足に高めること、謂はば信仰すると云ふ他動詞を自動詞に變ずることは、目先の變つた方法ではある、が然し恐らく懸てはより少からぬ矛盾に陥るものである。

生が最も廣い意味に於て文化的即ち創造的か或は創造されたものを獲得するものか熟れかであるや否や、自分の本質必然性に依つて入つて行く之等の而して更に多くの現象に於て、斯くて争闘が明かになつて来る。此の生は諸形式を産むか自分を諸形式の中に働かすかせねばならぬ。吾々は直接には生であり、そして其れに同様直接には生存、力、方向等の筆には盡せない感情が結び付いてゐる。が然し吾々は其れを唯其の時その時の形式に

於てのみ有つのである。此の形式は既に強調した如く、固有の プロフェュエント 出處の權利と意義とを具へ、生を超えた不易性を主張し要求し乍ら、現れた瞬間に於て全く他の秩序に屬してゐること示す。夫が爲に然し生自身の本質、其れの波打つ動力、その時間的な運命、その諸要素の各々の斷えざる分化に對して矛盾が生ずる。生は其れが其れの反對者即ち形式に於てのみ現實の中に現れると云ふ事と堅く結び付いてゐる。吾々が端的に唯生と呼び得る(一)かの内面性が其の無形成な強さに於て自己を主張する程度に應じて、他方諸形式が其等の頑固な自存性、效果の無くならない權利の要求に於て吾々の存在の本來的な意味或は價值として現れる程度に應じて、恐らく其故に文化が成長せる程度に應じて、此の矛盾は益々著しくなりそして益々和解できない様に見える。

(一) 生は形式の反對者であり、然るに何等かの方法で形作ら

れたもののみが概念を以て表される故に、茲で考へられた全く根本的な意味に於ける生と云ふ言葉は、或る不精確、論理的不明瞭から解放されねばならぬ。何と云へば若し、生に就いて概念的な定義を構成せんとし且でできるならば、凡ての形式の前又云彼方に置かれた生の本質は否認されることになる。諸形式の領域と一致する概念の層への媒介的な迂路なしに、其れの動性に於て其れ自身が意識されることは、意識された生としての生に與へられるだけである。事柄の本質が斯く表現の可能性を制限すると云ふことはかの原理的な世界觀的な敵對の明白性を貶しはしない。

茲に其故生は其れが全然到達できない或るものを意欲し總ての形式を超えて自分の赤裸々な直接性に於て自分を限定し現さうとする、然し全然其れに依つて限定された認識、意欲、形成は唯ある形式を他の形式に依つて置代へ得るに過ぎず、決して形式一般を形式の彼岸に在るものとしての生自身に依つて置代へることは出来ない。吾々の文化の諸形式に對する激しく襲ひ或は徐ろに行はれてゆく總ての攻撃——之等に對して唯生としてそして生なる故に生の力がより明かに或はより祕かに構へた攻撃は、精神が自分を文化へ發展し即ち自分を諸形式に於て示すや否や、陥る所の精神の

最も深い内面的な自己矛盾の發現である。そして此の漫性的な争闘が急性的な争闘に高められ、そして又存在の全範圍を理解せんと求めた總ての歴史上の時代の中で、如何なる時代も吾々の時代程明亮に其れを時代の根本動機として露はにしたものはないかの様に私には見える。

然し乍ら總ての争闘と問題とは解決される爲に存すると云ふのは又俗臭い偏見である。兩者は生の營みと其の歴史とに於て尙別個の諸課題を有つてゐて、其等自身の解決とは獨立に充實してゆくのである、其故に其等は、假令未來に於て争闘が其れの和解に依つて取去られるのではなく、唯其れの諸形式と諸内容とが別々に依つて取去られるにしても、決して無駄ではないのである。何となれば凡て上述の問題的な諸現象は吾々に次の事を無論意識せしめるからである、即ち如何に多くの現在のものが、其れに立留まるには餘り矛盾に満ち過ぎてゐることか、そして夫は其の程度に應

じて疑もなく一層根本的な推移を指示して居り、そして之は宛もただ現行の形式を新しく肉迫して來る形式の中へ變改することのみに關するかのやうであると云ふこと。何となれば後の場合では嘗て今日ほど文化諸形式の先後間の橋渡しが全く斷たれて見え、唯それ自身無形式な生のみが其の斷れ目の中に置かれる爲に存する様に見えたことは殆んどない。然し同様に又無論其れは典型的な文化變動を直指して、現在の諸力に應じた新形式を追ふて行く、然し之等で以ては唯——恐らく徐々に意識され、勝敗未決の戦を一層先へ推し出し乍ら——或る問題を新しい問題に依つて、或る争闘を新しい争闘に依つて押退けるに過ぎない。然し乍ら其れが爲に戦と平和との相對的な對立を包括する絶對的な意味に於ける戦である所の生の眞の下繪は充實されるのである——恐らく此の對立を同様に包含する所の絶對的な平和は常に神の祕密に止るが。(丁)